

夏目漱石と遠藤周作における留学体験

——自己確立の時——

二 平 京 子

夏目漱石と遠藤周作における留学体験

——自己確立の時——

Experiences of Studying Abroad: The Cases of Natsume Soseki and Endo Shusaku

—— Opportunities for Self-Establishment ——

二平京子

Nihei kyoko

要 約

漱石にとって、栄えある国費留学生として過ごしたロンドンでの生活は、最も不愉快な2年間であったという。その理由の第一に、ロンドンでの文学研究上の挫折がある。その敗北感の中で、漱石は心理学、社会学等諸々の角度から総合的に文学の本質を極めるべく、神経衰弱に陥るほどの独学を開始し、その結果、英文学の本質を明確に掴み、「自己本位」の思想をも確立した。

一方、遠藤にとっても、フランス留学の3年間は、過酷を極める経験であった。この間、遠藤は人種差別の現実に深く傷つきつつ、西欧との距離の再発見を余儀なくされた。しかし、その強烈な違和感の中でこそ、遠藤は「人間内部の原初」に至る「人間凝視」を使命とするカトリック作家への道を決意するに至ったのである。

両作家とも、筆舌に尽くしがたい苦悩の中で、その距離感に耐え、その中から自己の歩むべき道を見出し得た先達であった。

はじめに

遠藤に「私は一つの踏み台になりたい」（井上洋治『余白の旅』）という言葉がある。

一人のキリスト教作家として自分がどこまで進めるか、それはわからないのであるが、厳然として在る東西の壁なり、隔たりを可能な限り縮小し、せめて両者を結ぶための踏み台となる

これは、東西の隔たりの大きさを身をもって知る人のみが抱く悲壮な決意である。そのような認識と使命感とを遠藤に与えるのが「苦しくて苦しくてたまらなかった」と自ら回顧するフランスでの留学体験であった。

ところで、遠藤は佐藤泰正との対談（『人生の同伴者』）の中で、「われわれの先輩が留学して、みんな戻ってきたときは、ヨーロッパがわかったと言って戻ってきているでしょう。わからなかったと言って戻ってきたのが、漱石ぐらいじゃないかしら。」といみじくも述べている。事実、夏目漱石にとっても、2年

間に渡るロンドンへの留学体験は、精神の均衡を失うほどに厳しいものであったという。しかし、留学体験なくして、作家夏目漱石の誕生は考え難く、もしそうであったならば、今日わが国の文学史はどのような様相を呈していたらだろうか。

本稿においては、両作家の留学体験が具体的にどのようなものであったかに目を向け、その共通点を明らかにしてみたい。

第1章 夏目金之助の英吉利留学

第1節 ロンドンでの生活

漱石は『文学論』の序において次のように述べている。倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に住する一匹のむく犬の如く、あはれなる生活を営みたり。倫敦の人口は五百万と聞く。五百万粒の油の中に、一滴の水となつて、辛うじて露命を繋げるは、余が当時の状態なりといふ事を断言

して憚らず。

文字通りに解釈すれば、いかにも悲惨な状態が想像される。更に「乞食の如き有様にてエストミンスターあたりを徘徊して」いたとなれば只事ではない。尤も、金之助のロンドンでの具体的な生活振りが、記述ほどに厳しいものではなく、かなりの誇張が見られることは、後の調査で判明している（『ロンドンの夏目』出口保夫）。しかし人間にとっての内的現実が必ずしも客観的事実と同一とは限らない。そうであれば、決して混じり合わない「水と油」といった感覚はどこから生じたのであろう。2年間に味わった孤独感、孤立感、挫折感などがその要因と考えられまいか。

第2節 云うべからざる孤独

1900年10月28日夜、1ヵ月半の船旅を伴にした同行者と別れ、夏目金之助は単身ロンドンのヴィクトリア駅に降り立った。第1回国費留学生として、大英帝国の首都、世界最大の近代都市ロンドンでの2年間の留学生活の幕開けである。

その翌日のこと、金之助は南ア戦争義勇兵凱旋祝賀パレード渦に巻き込まれた折の思い出を「印象」の中に記している。

自分は此の時初めて、人の海に溺れたことを自覚した。考えながら背の高い群集に押されて仕方なしに大通りを二つ三つ曲がった。曲がるたびに、昨夕の暗い家とは反対の方角に遠ざかって行く様な心持がした。さうして眼の疲れる程人間の沢山ある中に、云うべからざる孤独を感じた。（中略）しばらくして振返ったら、竿の様な細い柱の上に、小さな人間が一人立っていた。

この「云うべからざる孤独」は9年の歳月を経て尚、漱石の中に生々しく生き続けた強烈な体験であった。末延芳治晴氏はこの体験を、養家にあつた金之助が姉によって実家に連れ戻された夜の原初的感覚と重ね合わせて捉えている。そして、このトラウマがロンドン生活の基底に流れているとしている。

こうして見ると、英国での新しい生活には決して意気揚々たるイメージはなく、不安や孤独、あるいは孤立感を抱えたものであったといわざるをえない。更に、現地の人々の東洋人に対する理解の乏しさ、人種的な違和感、人間が人間らしく生きることを阻止するような機械文明への懐疑。このようなところから「不愉快の二年」という回想が生じたものと思われる。しかし、最も深刻な雰囲気は、やはりロンドンにおける厳しい文学研究の挫折にあつたと思われる。

第3節 ロンドンでの文学研究

ロンドンでの研究方法については、全て本人が開拓すべきものとして、文部省からの指示、援助は一切なかったという。往路の船の中でノット夫人が、ケンブリッジ大学への紹介状作成を約束していることから考えて、夏目金之助としては、当然大学での研修を予定していたと思われる。しかし、当時はまだロンドン大学以外に英文学の講座は開かれておらず、仮にあつたとしても、文部省からの学費では、正規の留学生として大学に籍を置くことは不可能であつたという。

予想しなかつたこのような事情から、市民大学レベルのロンドン大学で3、4ヶ月のみケア教授の講義を聴講するが、古英語、中英語を一切学んでいない金之助にとって、それはほとんど理解を超えた内容であつたと渡部昇一は述べている。そのため、西洋人との研究上の交際は、個人教授のクレイグ先生一人に限られたため、独学で一冊でも多くの書物を読破する方法に研究を切り替えるより他に打つ手はなかつた。その状況が『文学論』の序に次のように記されている。

此間余は縁文学に関する書籍を手になんて読破せり。一身一家の事情のため、擅まに、読書に耽る機会なかりしが故〜此機を利用して一冊も余計に読み終わらんと目的以外には何らの方針も立てる能はざりしなり。

この方針はどのように具現されていったのか。それは実に大きな犠牲と葛藤を伴うものであつたという。

あらゆる節約をして斯様なわびしい住居としているのは、一つは自分が日本に居た時の自分ではない単に学生であると云ふ感じが強いのと、二つ目には折角西洋に来たものだから成る事なら一冊でも余計専門上の書物を買って帰りたい欲があるからさ。然しながら自分の着て居る着物が漸々変色してくるにつれて、自分が段々下落するやうな心持のするときは何の為にこんな切り詰めた生活をするんだらうと思うこともある。本も何も買えなくて善いから為替はみんな下宿料にぶち込んで人間らしい暮らしを仕様といふ気になる。（『倫敦消息』）

実際、帰国時に、所持していた書籍が500冊にもなつていたという。この事実を考え合わせても、金之助の一心不乱な取り組みが十分に窺えるのではないだろうか。蛇足ながら、初期の作品の大きなテーマの一つとなっている「一心不乱」の姿勢はなによりもまず作者自身の生き方であつたと思われる。

第4節 文学の如何なるものか

1年の後、この方針の限界に気付くと、これを「検束なき読書法」として避け、方針の大転換を執行する事となる。この決定を金之助は、大きな焦燥感や敗北感の只中で行ったと考える時、この間に行使された金之助の分析力や決断力の確かさは驚嘆に値する。

ただ、この転換への決断には、この事情だけではなく、「文学」への認識の深まりが大きな要因となっている点も重要である。つまり、慣れ親しんだ漢籍と比べ、これに劣らぬ知識を有しながらも、金之助はこの英文学を「味ひ得」ぬ現実を告白している。

漢学して所謂文学と、英語にして所謂文学とは、到底同定義の下に一括し得べからざる異種類そのものたらざる可からず

との結論に至り、「文学とは如何なるものか」という大問題と対峙することになる。

大学を卒業して数年の後、遠き倫敦の下に、余が思想は始めて此局所に出会せり。(中略) 斯程見易き事を遙々倫敦の果てに行きて考え得たりと云ふは、留学生の恥辱なるやも知れず。尤れど事實は事実なり。

勿論、そのような事はなく、いかに苦しい発見であっても、ロンドンにおける一心不乱の取り組みがあつて初めて見出しえた「局所」であつたらう。『漱石文学の基底』で大竹雅則は次のように記している。

ここに英国での英文学との出会いがいかなるものであつたか、がようかがえる。幼少より文学とはいかなるものであるかという解答は、漱石は無意識裏に漢籍から得ていた。したがって同じ文学のジャンルである英文学も漢籍と大同小異であろう、という漱石の楽観的な見通しが働いていたことが推測される。

漢籍は漱石にとって傷ついた自我を救済してくれる「休息場所」であつた。しかし、1年間一心不乱に取り組んだ英文学は、「休息場所」とは逆に、金之助を「人事百般の俗世に引き戻そうとする」。この両内容のギャップに茫然自失した漱石は深刻な自己嫌悪を免れ得なかつた。しかし、この時にこそ初めて金之助は英文学の本質を理解し始めるのである。このどん底の時に「自分は新たに出立した」と「私の個人主義」には記されている。事実、彼は「今までの文学に対する幼稚な固定概念を廃し、新たな角度から文学をきわめ」るべく、心理学、社会学、経済学、哲学その他、諸々の角度から総合的に文学の

本質に迫るといふ未曾有の作業に取りかかつたのである。

余は心理的に文学とは如何なる必要あつて、此世に生まれ、発達し、退廃するかを極めんと誓へり。(中略) 此一念を起こしてより六七ヶ月間は世が生涯のうちに於て尤も鋭意に尤も誠実に研究を持続せる時期なり。而も報告書の不十分なる為文部省より譴責を受けた時期なり。当然余の予算にては帰朝後十年を期して充分な研鑽の結果を大成し、然る後世に問ふ心得なりし。(中略) 余は此のノートを唯一の財産として帰朝したり。

序において以上のように述べられた『文学論』は、帰国後にも漱石が予定していたような形で世に問うことにはならなかつたが、少なくともロンドンで健康を損ねるほどの取り組みが結んだ偉大な実りであつた。江藤淳が「序」以外はほとんど読むにいたらないとして、全面的に否定したのに対し、佐藤泰正の、「序」そのものに漱石文学の母胎を見ようとする発言は傾聴に値する。

第5節 留学中に掴み得た思想 一自己本位一

このような行動へ金之助を促した内的な経緯が「私の個人主義」の中に詳しく記されている。そもそも、それまでの金之助は「文学が解らずじまいだつた」大学での3年間や、「お茶を濁して遣り過した」という教師生活の間中、「腹の中は常に空虚で」、「不愉快な煮え切らない漠然たるものが至る所に潜るやうで堪らなかつた」という。そのために、そうした閉塞状態(「恰も囊の中に詰められて出る事の出来ない人のやうな気持」)を突き破る「一本の錐」を探し続けていたと述べる。この「錐」こそ、金之助が挫折の時に自ら掴んだ「自己本位」という思想であつた。以下に詳察したい

そもそも国語辞典には見当たらない「自己本位」或いは「自我本位」の「本位」とは「基本となる標準、中心になるもの」(広辞苑)の意であるから、それは「自己を自己の行為判断の基準」とする考えと理解できよう。つまり、基準を他に求めるのではないということである。この「自己本位」或いは「個人主義」の内容(以下この二語を類義語として理解したい)を「私の個人主義」の中から少し丁寧に読み取ってみたい。なぜならそれは、金之助を「強くし」、金之助をして「陰うつな倫敦」を「軽快な心をもって」眺めしめ、そして活路を開いてくれた、非常に価値ある生きた「思想」であると漱石自身繰り返し強調しているキーワードであるからだ。

私が①独立した一個の日本人であつて、②決して英国

人の奴婢ではない以上は、これくらいの①見識は国民の一員として具えていなければならない上に、世界に共通な正直という徳義を重んずる立場から見ても、私は①私の意見を曲げてはならぬのです。(数字・傍線: 二平)

まず第一に注目したいのは、「自己本位」では近代的な人間認識が前提とされている点である。「私」とは「独立した一個の」人間なのである。つまり、漱石は「個人」を自由と責任を持つ一個の独立した存在として捉える。これは言うまでもなく封建的な感覚とは全く異なる認識である。

引用文に付した傍線部について確認すれば、

傍線① 前述の通り、金之助の心が「常に空虚」であったのは、この「見識」あるいは「私の意見」を見出しえぬままに「西洋人の評」を「その当非はまるで考えずに」「鵜呑み」にし、「その評を触れ散らす」ことの虚しさの表れであった。それゆえ、これまでの「他人本位」を脱して自分でそれを見極めるだけの「見識」を持たない限り、その「虚」を満たすことは出来ないのである。

『文学論』にある「余が生涯のうちに於て尤も鋭意に尤も誠実に研究を持続せる時期」とは、金之助がこの「自己本位」の立証を試みていた時ということになる。

傍線② この発言には注目したいと思う。最先進国といえども、両国間に主従関係があるのではない。たとえ、劣等性を認めなくてはならなくとも、盲目的に英国を受け入れ、「借着」はしない。この東洋人としての誇りと決意とが焦燥と敗北感の只中にある漱石を支えたのではないだろうか。「そう西洋人振らなくとも好いという動かすべからざる理由を立派に彼らの前に投げ出してみたら、自分もさぞ愉快だろう、人もさぞ喜ぶだろうと思って、(中略)それを成就するのを私の生涯の事業として考えたのです。(中略)その時私の不安は全く消えました。私は軽快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めたのです」と語っている。

第二は、自らの「彼ら何ものぞや」との気概は、「個」の主張が時に免れない淋しさの甘受を要求するという点である。

個人主義は人を目標として向背を決する前に、まず理非を明らかに去就を決めるのだから、或場合にはたった一人ぼっちになって、淋しい心持がするのです。

この箇所について、小森陽一は『13 歳からの夏目漱石』で次のように述べている。

この「淋しさ」は一切のセンチメンタリズムとは無縁なものなのだ。既存のあらゆる「人」(他人)の考え方を懐疑しつ

くし、徹底してその「理非を明らかに」たうえで、自らを主張すべきことがあれば、たとえ「たった一人ぼっちになつたとしても、それをあえて実践するという、単独性を生きぬこうとする覚悟なのである。

ところでこうした徹底した姿勢は、その認識のない人々には当然理解に窮するものであり、誤解を招く余地は大いにあつたろう。実際、『文学論』の「序」には、英国人から「神経衰弱」と言われ、日本人から、しかも親戚からさえ「狂気」と言われたとある。これに対し漱石は、

神経衰弱にして狂人なるが為『猫』を著し『漆虚集』を出し、『鶉籠』を公にするを得たり。と思えば、余は此神経衰弱と狂気とに対して、深く感謝の意を表するの至当なるを信ず。

と訴えている。実に、この「神経衰弱」と「狂気」とは、金之助が、苦しみの中から掴み取って「自己本位」を徹底的に誠実に貫いた証と捉えうるものではなかったか。「自分で自分が道をつけつつ進み得たという自覚こそが自信と安心」を与え、「自らそれで満足なのだ」と漱石は言い切っている。蛇足ながら、漱石は「私の個人主義」に「私はこの世に生まれた以上何かしなければならぬ」との短い一言を記し、またこれに類似した事を他所に於いても述べているが、彼のこうした真面目な人生観こそが、この「自己本位」或いは「個人主義」という「思想」を探り当て、それを「一心不乱」に貫こうとする生き方へと漱石を駆り立て続けたのではなからうか。

また、漱石は誤解を避けるため、真の「個人主義」は「道義上の個人主義」であって、「わがまま」や利己主義とは異なり、「他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬する」事であると、その根本的な相違点を明示している。また、「個人主義」が国家主義に反し、これを打ち壊すように受け取られる点については、「私共は国家主義でもあり、世界主義でもあり、同時にまた個人主義でもあるのであります」と、これらに何の矛盾もないことを、印象深い簡潔な言葉で述べている。

最後に、漱石がこの講演の中で英国について、次のように述べている点を取り上げてみたい。

ご存知の通り英吉利という国は大変自由を尊ぶ国であります。それほど自由を愛する国でありながら、また英吉利ほど秩序の調った国はありません。実を言うと私は英吉利を好かないのです。嫌いではあるが事実だから仕方ないと申し上げます。あれほど自由で、あれほど秩序の行き届いた国は恐らく世界中にないでしょう。

これは「自由と義務」に対する英国人の態度について述べる箇所であるが、この点に限らず、漱石は鋭い洞察力をもち、好悪を超えて英国全般を眺めた。だからこそ、重要な示唆や問題意識、或いは気付きが与えられたのだと考えられる。

第2章 遠藤周作のフランス留学

漱石の留学からちょうど 50 年、終戦後日本がまだGHQ占領下にあった 1950 年 6 月 4 日、遠藤周作は、井上洋治等と共にフランス船マルセイエーズ号で横浜港を出港した。この留学はザビエル日本渡来 400 年を記念して上智大学の数人の教授が計画し、フランスのカトリック教会と一部の篤志家の支援によって実現されたもので、遠藤の留学の目的はフランスの現代カトリック文学の研究であった。ここでは、人間の凝視という点に限定して遠藤の留学体験を捉えてみたい。

第1節 敗戦国の四等船客

マルセイエーズ号では「四等船客」という立場から、非常に貧しく辛い船旅を余儀なくされた。中でも敗戦国の四等船客という事からか、黒人船員等の差別的暴言に打ちのめされることも多々あった。これは遠藤に人種間に横たわる超え難き溝を意識させる最初の体験となった。例えば、

白人のボーイは私の来かたが遅いと怒鳴りつけ、のみならず私を突き飛ばしたのである。「俺は客だ」と私は叫んだ。「客？」ボーイは笑った。「四等の奴は客じゃないぜ。船はお前たち黄色人(サールジョンヌ)や黒人を憐れんで乗せているんだ。汚い黄色人！」と彼はハッキリ私に向かって叫んだ。これは私が生まれて初めて皮膚の色によって軽侮を受けた経験であった。

(「有色人種と白色人種」)

この留学において、遠藤は四等船客の屈辱のみならず、人種差別の現実を身をもって体験することになるが、これらが遠藤の心を如何に深く傷つけたかは、処女作「アデンまで」に痛々しく描かれている。これに加えて、マニラ・サイゴン・シンガポールを経る中で目の当たりにした痛ましい戦争の傷跡と、戦争犯罪国の一員であるという自覚がある。

フランス留学についてバラ色の夢を持っていた私の気持ちは、この船旅の間に少しずつ変わっていた。

(「出世作のころ」)

この1ヶ月間の船旅の意味を遠藤は次のように述べている。

もともと私は大学の研究室に残るつもりで渡仏してきたの

だが、渡仏の船のなかで次第に心境の変化をきたし、小説を書きたいという気持ちになってきたのである。

(「私と日本人」)

遠藤周作全集の年譜にあるように、留学の目的が「フランスの現代カトリック文学の研究」ということであれば、期待される道は「学徒」であった。しかし、多くを見、体験した遠藤は、もはや物書きになりたいとの幼い頃からの夢を捨てることができなくなった。評者ではなく、人間を凝視し迫及する「小説家」になる決心をこの時期に固めたものと考えられる。

第2節 「人間凝視」

理想であり、憧れであったフランスが留学体験を通して遠藤に見せた姿は、西洋の異質性と独善的かつ閉鎖的な一面であった。幼いころから身の丈に合わぬ「洋服」として感じ取っていたキリスト教との距離は縮められることはなかった。普遍的という意味のカトリックが、最も西欧的な思想であったという距離の再発見は、不幸にも遠藤の留学の重要ポイントとなった。

しかし、こうした窮地を経てこそ、遠藤は留学の3年前に「カトリック文学」に記した評者としての認識を、身をもって表現する者となったのではないか。その使命遂行は、徹底した「人間凝視」を、遠藤にを要求するものであった。

人間は神を選ぶか捨てるかの自由を持っている存在である。この人間の自由を文学に賭けるのがカトリック文学です。つまり、カトリック文学も、他の文学と同じように、人間を凝視することを第一目的とするのです。

(「カトリック作家の問題」)

遠藤にとって、それは弱者であり、劣者である自分自身を正視し続けることであった。

このような自己発見に加え、遠藤が留学体験の中で探し求めたことに「西洋という正統の中に埋もれている異端分子を掘り起こし、それとの共感を通して西洋と同化する」ということがあった。留学中、遠藤は体調の悪化も厭わず、フォンスを訪れ、対独協力者の虐殺現場を訪れている。

こうした、美しく正しいフランスの影に隠れた人間の内部を凝視し、その人生に「永遠の余白の世界」を留めることを、遠藤は求め続けたのであろう。それは確かに、小説技術の習得でありながら、そこに留まらず、遠藤がキリスト教徒として生きること自体でもあったはずだ。かくて「人間内部の原初」に至る試みは、この留学で始められ、生涯の課題となった。

遠藤が、この「生涯の課題」に文学活動の全てを懸けて取り組んだ事は、その後の多くの作品が証明しているといえる。

第3章 夏目漱石と遠藤周作における留学体験

遠藤と親交の深かった三浦朱門氏は、留学には「鷗外型と漱石型」があり、「留学生のエリート性と落伍者性は森鷗外と夏目漱石の留学体験に見ることができる」として、「遠藤の場合は明らかに漱石型である。」と述べている。(『わが友遠藤周作』)

また、古屋健三も『遠藤周作における留学の意味』において、留学生の二つのタイプを次のように捉えている。

要領よく西洋と接し、身に合っているものだけを摂取して、肥え太って帰ってくるタイプの留学がある。しかし、西洋が異質なものであれば、眞の留学とは、逆に養分を吸いとられ、体をこわして、はじき返される体験なはずである。

実際、両者の留学体験は共にこの異質なものと真正面から向き合い、その結果深い挫折と孤独感を味わい尽くした点で共通点を有するといえよう。

しかし、共通点は勿論それだけではなく、漱石の言葉で言えば、「自分の鶴嘴で掘り当てるところまで行こうとする並々ならぬ苦悶と努力の末、「ここにおれの進むべき道があった！ようやく掘り当てた」（私の個人主義）」と言える手ごたえ、少なくともその萌芽を見出して持ち帰ることができた点にも見出せると思う。つまり、彼らの留学体験は、それなくして、彼らのその後が考えられないほどに決定的な体験であったのだ。

アデンの砂山を眺めての感慨(漱石は往路で詠んだ英文断片において、遠藤は「アデンまで」において)、自らが黄色人種である事への言及、現地人から浴びせられた鋭い言葉の作用等々、細かい点まで挙げれば驚くほどに類似した出来事があり、興味深いのが、ここでは、第1に、漱石の「自己本位」と遠藤の「人間凝視」、について、第2にキリスト教に対する両者の姿勢の2点について考えてみたい。

第1節 漱石の「自己本位」と遠藤の「人間凝視」

遠藤が「人間凝視」を作家の使命として考えていた事については2章で述べたが、凝視には当然或る視点が設定され、それによって見るべき対象と、その方法が、つまり視方が決定されよう。これも先で見えてきたことではあるが、遠藤は西洋の現実を探る中で、自分に固有の視座を固めていったのではないか。つまり、遠藤は規範であり憧憬的であったフランス

ではなく、現実のフランスとその歴史の中に視線を向け、そこに人種や文明の相違を越え、人間としての共通の基盤を見出そうとしたのではないか。

「青い小さな葡萄」の主人公が、フォンスの井戸の事件を知り、「あんた達だって同じことじゃないか、あんた達だってやっただじゃないか」と心の中で叫ぶ。これは黄色人種の屈折させられた傷の疼きというだけではなく、掘り下げた底にあるもの、それがいかようなものであっても、それを凝視しようとする遠藤の視座の顛れと視ることはできないだろうか。12月21日の日記には、

私は今日、決心した。一切の外部的思潮に足をすくわれない事、私は自分の最も確実である、あの方法によって、人間内部の原初的なものに到達する事、それ以外に私は私を定める事ができないように思われる。

とある。遠藤の留学以降の文学的歩みは、こうした飽くなき人間凝視の試みであり、その只中に恩寵の光を求める事ではなからうか。そして、更に

この存在の始原に見る「混沌とした無秩序」を秩序化し、「人間の全てを視る事」をキリスト教が妨げんとするなら、この宗教的リゴリズムに対しては抵抗するほかない。

と遠藤が言うなら、カトリック作家・遠藤のこの「人間凝視」に対する妥協なき執念こそ、50年を遡ったロンドンで、漱石が編み出した「自己本位」の生き方にしっかり通じる姿ではなかったかと思う。どちらにとっても、痛切なる(劣者としての)留学体験なくして手に入れることのできなかった境地であろう。

第2節 キリスト教に関する姿勢

末延は『夏目金之助ロンドンに狂せり』で『自己本位』の思想の萌芽は、ノット夫人の船室で『物まね』を控え、『贈与』の『返礼』としてのキリスト教への改宗を拒否し通した金之助の、だれとも共有できない『心』と『身体』のオリジナリティにあったといっている。『自己本位』の「萌芽」が、既にノット夫人との交わりの中にあっただという事を、なるほどと諾うものの、「返礼」としての「改宗」こそ「道義」に反する行為であれば、これを金之助の「だれとも共有できない」「オリジナリティ」の発露とする解釈には疑問が残る。

「漱石ほどの人が、キリスト教国で育ったならば、相当に堅固な信仰の持ち主になったであろう。また、「漱石は本質的には宗教的求道者かもしれない」といった評価がある。更に、英文学理解においてこれを惜しむ声もある。寿岳文章氏は

『漱石と英文学のつながり』の中で次のように指摘している。

私が異様に感じたのは、漱石山房の蔵書に、カーライルやマコーレイ以外、英国史はもとより、歴史一般に関する書物が欠落していたことと、西欧、特にイギリスにおけるキリスト教の屈折の多い浸透を主題にした書物が 1 冊も見当たらないことである。

歴史的感覚の中でキリスト教とイギリス文化に触れる——この作業を抜きにして、「英文学の地霊への見参は望めまい」と寿岳は述べている。それは実に残念なことに相違ないが、私が問題としたいのは、漱石が「神を信じるができない」と言明して憚らず、しかもそれを貫いたのはなぜかということである。いくつかの理由があるろうが、その一つとして注目したいのは、未延の次の引用と解釈である。アラビア海から紅海に抜ける航海中に船の上で書いた散文詩風の英文の手記「断片4A」で金之助は、船中でのイギリス人宣教師たちの布教活動と、彼らと戦わせた宗教論争について次のように記述している。

船中にはおびただしい数の宣教師がいる。(中略)彼らは唯一の最高神というものを主張してやまない。(中略)余はキリスト教は偉大な宗教なのだから一度信仰に入れば、必ず救済されるに違いないと確信しているものである。そうではあるけれども彼らが偶像崇拜と呼んでいる人々もまた、それなりの信心によって救済を見出しているのである。

ここで金之助は今日言うところの宗教における「多元主義」を主張していると思われる。その時から、100 年経った今もそれぞれの教義の唯一絶対普遍性を主張して対立し、悲惨な宗教戦争を引き起こす火種になっている現実を見るとき、この主張には説得力があると言わざるをえない。

以上、100 年前に漱石が記したキリスト教に対する問題意識の現代性、或いは彼の先見性に驚かされるが、更に驚かざるを得ないのは、それが遠藤自身の生涯を懸けた課題に他ならないという不思議に対してである。この点については、佐藤泰正の『遠藤周作を読む』からの引用をもって対し、本稿の結びとしたい。

彼(漱石)には、英文学が文学だというアイデンティティが耐えがたかった。言わば漱石はヨーロッパ的普遍を相対化し、西洋と東洋という両者の『質的異質』を『量的異質』に還元せんとしたのだ」とは、柄谷行一が「漱石と文学」と題して語るところだが～遠藤周作の留学体験のかかえた課題もまたそこにあった。彼もまた西欧のキリスト教が即

ちキリスト教そのものだという彼らの「アイデンティティが耐えがたかった」。彼は「ヨーロッパ的普遍を相対化しようとして闘った。これが、遠藤が留学体験を通して持ち帰った終生の課題であった。(中略)こうして漱石、遠藤の両者は共にヨーロッパの思想、文学、宗教とのいやおうない対決を迫られ、それを終生の課題とするほかなかった。

実に半世紀もの時の隔たりをもつ二人の偉大な作家が、異文化との誠実かつ熾烈な格闘を通し、共通の課題の自覚に導かれた事実を今回確認し、大きな不思議と感動を覚える。「グローバルとは根源的なことですよ」とは遠藤の言葉であるが「人間とは何か」「文学とは何か」「生きるとはどういうことか」といった根源的な問いを真摯に深く掘り下げ、自らの眼で見極めようとする時、時空を超えた何かがその人々に見え始めてしまうのであろうか。

参考文献

- 佐藤泰正著『夏目漱石論』筑摩書房
 『これが漱石だ』櫻の森通信社
 江藤淳著『漱石における東と西』日本比較文学会編
 大竹雅則著『夏目漱石論考』桜楓社
 『漱石その遙かなるもの』おうふう
 渡部昇一著『漱石と漢詩』英潮社
 末延芳晴著『夏目金之助ロンドンに狂せり』青土社
 小森陽一著『13歳からの夏目漱石』
 古屋健三著「遠藤周作における留学の意味」(『国文学』)
 遠藤周作／佐藤泰正『人生の同伴者』春秋社
 柄谷行人著『漱石論集成』岩波現代文庫